１月２０日（木）
責任について～コミュニタリアン・リバタリアン・普遍主義者・サンデル

作成者：想田瑞恵

想田（以下S）：栗原さんは「感情的な意味では相手を許すことを強要されてはならない」としていますが、その場合、道徳の問題はどうなりますか。「正直であるべきだ」や「嘘をついてはならない」のように、道徳は心のあり方を強要するものだと思います。ならば、相手を許すことも強要される、つまり、「許すべきだ」と言うことはできるのではないでしょうか。

栗原さん（以下K）：確かにそうですね。ここで言いたかったことは、「アンジェリーナ・ジョリーをかわいいと思え」と言うことはおかしいように、感情は強制されえないということです。「相手のことが許せない」という気持ちは、言われて消せるものではありません。

S：でも、もし気持ち・感情というものを変えることができないのだとしたら、対話をする意味がなくなってしまうのではないでしょうか。

K：そうした感情は、消そうと思って消せるものではないということです。意識して感情を消したりはできません。

S：なるほど。感情は触発されて起こるものなので、感情を強制することは原理的に無理だということですね。でも、「許すべきなんだろうな」のように、心のあり方を正すことは考えられますし、道徳とは心のあり方のそうした強制であるとも言えると思うのですが。

檜垣先生（以下H）：「許すということは、感情的な意味と政治的な意味の二つしかないのか」のように、問題を設定したほうがいいでしょうね。

S：他に、道徳的な意味もあるのではないのか、ということですね。感情は、強制されえず、責任も問われえませんが、心のあり方である道徳は、強制されるし、責任も問われます。例え触発された感情が悪いと思っていなくても、他者が「それは悪いと思うべきだ」と強制しうるのが道徳の問題ということです。

H：道徳は、そのひと個人のものですね。もちろん感情もそうですが。想田さんは、「日本人である責任を引き受けないと、日本人であることから自由にはなれない」ということを言っていましたが、これはどういうことですか。

S：「日本人である」という偶然的なことも、自己を示す一つの表現として受け入れるという意味で言っていました。

H：その場合、引き受けた責任とはどのようなものでしょう。

S：共同体の構成員としての責任です。つまり、侵略の歴史を持つ共同体の構成員の一人だということを、引き受けることです。ただ、この場合、私自身は戦争の時代に生まれていないので、道徳的責任ではなく、政治的責任だと思います。私は、日本という共同体に所属し、そこである役割を担い、生活しています。なので、賠償金を払ったり、共同体の歴史を非難された場合は、それを過ちだと認め謝罪することはします。けれど、それは共同体の構成員としての責任から謝罪したのであって、やはり私個人として謝罪する必要はないと思います。

H：「共同体の構成員としての責任」というのは、個人の責任ですよね。サンデルは、義務を3つに分けています。一つは、カントの言うような、人類共通の普遍的できつい義務。それから、「自分のやったことには責任がある」という、いわゆる自己責任の義務。そして、コミュニティの一員としての義務です。ロールズは最初の二つしか認めていないため、サンデルに抽象的だと批判されるわけです。サンデルは、ある共同体に生まれたのはたまたまでも、その共同体を背負って語る責任があるとしています。想田さんの言い方だと、結局、責任は個人にはないとしており、この3つ目の義務を認めていないように思うのですが。

S：「日本人であることを引き受けることにより生じる責任」とは、まさにその3つ目の義務、共同体の一員としての義務のことだと思っていました。ただし、戦争の時代に生きていた人には、道徳的責任と政治的責任が両方生じうることになりますが、戦後世代には、政治的責任しかありません。

H:コミュニタリアンは、責任を2つに分けることはしないでしょうね。そうして二つに分けて考えることは、結局自分には責任がないと言っているようです。実際、リバタリアンは、戦後世代には戦争責任を認めないでしょう。ですが、前回確認したように、ニュートラルな個人は恣意的な想定に過ぎません。人は必ずどこかの共同体に所属しているわけですから。
S:政治的責任と道徳的責任を分けることは、ニュートラルな個人を想定することでしょうか。そうしたものを想定しなくても、責任は分けて考えられると思うのですが。
H:そこがポイントでしょうね。アリストテレスは、「人間は社会的動物である」と定義し、市民が市民たるゆえんはポリスだとしています。そのため、何が善いことなのか真剣に考えるなら、ポリスを抜きに語ることは不可能です。つまり、道徳的責任と政治的責任は切り離せないものとしてあります。この場合、共同体の負荷による責任が前提であり、自我の根幹ということになります。自己決定や自己責任は派生的なものになるわけです。一方、リバタリアンは、自己決定や自己責任が根幹です。サンデルの講義で代理母の例が出されていましたが、「誓約書に同意した」という事実を重くみるのがリバタリアンであり、ロールズもそうです。しかし、どう考えても判断力は人によって差があるため、これでは全く公平でない。サンデルは、もちろん誓約書を考慮しないわけではないですが、「共同体において釣り合いが取れているか」という視点を重視します。責任を、自己責任とコミュニティの一員としての責任にあえて分けるなら、サンデルは、自己責任における「自己」を抽象的なものだと批判し、自己責任を弱く取っているということです。
S:私には、「コミュニティの一員としての自己」のほうが、抽象的に思えるのですが。
H:確かに、ここまで区別を明確にすると、自己責任や自己決定を基本とする人は、議論を気軽に楽しめなくなってしまうでしょう。「コミュニティの一員」ということを強調すると、辛くなる人もいるでしょうから。問題が明確になってきましたね。まず、コミュニタリアンは責任を区別しないということ。そして、リバタリアンが主張し、サンデルが批判するような自己は、共同体の一員としての自己より抽象的で弱いと認めても良いということ。けれど、「政治において対話が有効だ」とサンデルのように主張するなら、この二つの自己とは違う自己を想定する必要があるのではないか、ということですね。とりあえず、わかりやすくしようとして、ロールズのように「同意と言えば誓約書という紙のことだろう」と言うのは、違うでしょう。神山さん、どう考えましたか。
神山さん:今の日本の法律では、親が人を殺したとしても、その責任を子が背負うことはありません。けれど、コミュニタリアンなら、法律を変えることを目指すのでしょうか。
H:そうかもしれませんね。あるいは、コミュニティを前提した上で、責任を分けるのかもしれません。法的責任と、それと質的には変わらないが明文化されていない責任というように。ただ、コミュニタリアンは法律をどう考えるのか、という問題はあります。日本だと、自分の子どもが罪をおかした場合、親が「すみませんでした」と謝罪しますよね。でも欧米人だとそんなことはない。明らかな証拠があったとしても、「騙されている。うちの子はやっていない」と言い張るんですよね。しかも、周囲の人も、そうした態度を非難しない。コミュニタリアンなら、自分の家族を守るということは、道徳的にも正しいのでしょう。それから、1996年の在ペルー日本大使公邸占拠事件で、制圧されたリーダーの母親は、「息子のことを誇りに思う」と言っていましたね。
S:論を追いきれませんでした。どういうことですか。
増田さん(以下M):息子よりも世間を重視する日本人と、国家よりも家族を重視するペルーやアメリカの人と、どちらもコミュニタリアンに見えるけれど、どうなのか、ということですね。
H:やはり日本が一番だめという気がしますね。コミュニタリアンにすらなれていないと思います。サンデルは、人類という共同体は想定しませんし、国家という共同体に対しても懐疑的です。せいぜい自分が生活している地域と、自分の家族くらいの規模の共同体について考えているでしょう。自分に一番身近な共同体を優先させるのがコミュニタリアンですから、子どもを擁護しない日本人はコミュニタリアンではない、という気がします。
S:まだよく分からないのですが。先ほどの責任の話で考えた場合、親は子どもと生活していたわけですから、実際に子どもが誰かを殺すところに居合わせなくても、ある種の「現場」には居たと考

えられます。ならば、親には、政治的責任だけでなく道徳的責任も生じていることになるため、子どもを擁護せず世間に謝罪するという姿勢も、理解できる気がするのですが。
H:「世間」はコミュニティではないでしょう。世間とは、決して「コモン」という共通性を備えたものではなく、勝手に想定されたものに過ぎません。それに対して謝ることは自己満足のような気がします。日本人の親は、子どものほうがより近いのに擁護しないという点で、コミュニタリアンではありません。また、サンデルは、コミュニタリアンに対してカントのことを「普遍主義者」と言いますが、そうした日本人の親は、当然、普遍主義者でもありません。
S:「より近いコミュニティに沿う」というのは、とてもパースペクティブなものであるため、道徳の問題が共感がベースとなり、道徳を正当に扱えないのでは、と思うのですが。
H:共感がベースだとは、必ずしも言えないでしょう。サンデルは対話を推奨していますしね。コミュニタリアンは、地球の裏側に住んでいるだろう人のことは置いておき、実際に関わる可能性が高い人を優先するということです。
S:地球の裏側に住んでいる人にも善いと認めてもらえるような行為について考えることが、道徳だと思うのですが。
H:コミュニタリアンが、地球の裏側に住んでいる人を無視するというわけではありません。身内の看病と人類の未来についての会議への出席と、どちらにも責任はあります。ただ、優先順位の問題だということです。そうやって考えてみると、やはりカントとは違いますね。カントは、会議に出席する責任のほうが強い場合もあります。サンデルは、ロールズやリバタリアンをカントと一緒にしていたけれど、カントの動機の話はどうつながったのか、疑問ですね。
M:「カントが感性的な Triebfeder を排するのと、無知のヴェールは同じこと」という流れだったと思います。それでも、確かに、カントの話だけ浮いている気はしました。
H:サンデルの講義の中でも、カントの回は難しかったという感想が多かったけれど、その直観はある意味当たっているでしょうね。難しいというより、話がつながっていない。やはり、カントが入っているのには無理があって、ロールズにはつながらないだろうと思います。
石田さん:大澤真幸の『「正義」を考える』(NHK 出版新書)でも、サンデルを批判をしていました。どのコミュニティの善が正しいのかはわからないし、先ほどの話にもありましたが、家族という共同体か地域という共同体か、どちらを優先させるべきかが微妙だということ。また、国境というあいまいなもので共同体が区切られているということ。たった1キロ先が違う国、違う共同体ということもありえる、ということですね。だから、戦争責任も、様々な立場で戦った人がいるのに、共同体で区切ってしまっていいかのかということが問題になります。
H:国境の問題に関して言えば、サンデルなら、目に見える範囲・話せる範囲の共同体を考えているでしょうね。国境で区切られた国より、距離的にも近いほうが優先されるということです。誰と接したかということを重視していますから。また、一つ目の「どのコミュニティの善が正しいかわからない」というのも、批判として当たらない気がします。サンデルは、一応、対話を提唱していますから。ただし、対話を主張しているといっても、普遍主義とサンデルはベクトルが違いますから、カントの考えとサンデルの考えも、やはり違うということになるでしょう。授業形式だけは似た感じになるでしょうが。そして、一人一人の意見が重要だと言えるのは、やはり、カントの考えの方であると言えると思います。ただ、不動の動者を想定すれば、多数決ではなくなりますから、個人個人の意見を尊重していると言えなくもないですが。
S:自由の問題はどうなりますか。対話をするということは、相手や自分が変わりうる存在だと認めているということです。それは、自由な人格を前提しているということでしょう。共同体の構成員としての自己に、そうした自由はあるでしょうか。
H:アリストテレスは、不動の動者に突き進む自由という形で、認めています。もちろんこの自由は好き勝手する自由ではなく、カントの言う自由と近いと思います。ただ、アリストテレスは、「人間は不動の動者を認識できるようになっている」ということを前提しています。創造神によってそう作られたのではないというのが、キリスト教と大きく異なる点ですが。カントも、「人間に共通するものがあっ

て、人や場面によってそれを表現する方法が変わる」ということは言っています。いずれにしろ、不動の動者のようなものを想定しないと、自由があるとは言いがたいでしょうね。サンデルは、人に意見を求めつつも、最終的には自分の考えに持っていくやり方が上手いです。けれど、それは、下手をすると、予定調和になりかねないため、本当に人の話を聞けているのか、疑問でもあります。途中で話が停滞するほうが対話らしいと思うのは、ある種の負け惜しみなんですかね。あと、前回のまとめ（1月13日）で、「国家以上に大きい共同体を考える必要がある」と言ったのは、失言だったと思いました。サンデルはそんなことは言っていませんから。ただ、ある意味当たってもいて、対話をするためには普遍性を想定しなければいけない。だから、サンデルは直接言っていないにしろ、普遍の想定をしている、ということを言いたかったのです。このことを不十分に表現した発言だったので、ここで補足しておきます。